

10. ^{99m}Tc HM-PAO の心筋集積の検討

原 正史 広田 嘉久 高木 善和
 下村 修 高橋 睦正 (熊本大・放)
 富口 静二 (再春荘病院・放)

^{99m}Tc -PAO は脳血流シンチグラフィに用いられているが、脳以外の他臓器にも広く分布することが知られている。われわれは ^{99m}Tc -PAO による脳血流シンチグラフィを行ううちに、心筋への著明な集積を示す例があることに着目し、SPECT を用いることにより心筋集積の検討を行った。対象は正常10例、心筋梗塞1例である。正常例において心/肺の uptake の count 比をとると、年齢に比例して心/肺比は高くなる傾向にあり、高齢者において心筋の描出が明瞭となる例が多かった。心筋梗塞例では ^{201}Tl と ^{99m}Tc -PAO 心筋集積は同一の分布を示し、planar image, SPECT image での梗塞部位の診断が可能であった症例を経験した。

11. 因子分析を用いた肝胆道シンチグラフィによる肝機能の評価

下村 修 広田 嘉久 高木 善和
 原 正史 宮尾 昌幸 高橋 睦正
 (熊本大・放)

慢性肝炎、肝硬変などのびまん性肝疾患 36 例に対し、 $\text{Tc-}^{99m}\text{PMT}$ による肝胆道シンチグラフィを施行し、因子分析を行うことにより、胆嚢・胆管系、心臓、腸管などの成分を排除した肝実質のみの機能成分（ヘパトグラム）を作成した。従来の、肝内に関心領域を設定し、その時間放射能曲線を解析する方法では、その局所の機能は反映しても、global な肝機能は反映していない可能性がある。これに対し、われわれが算出したヘパトグラムは、肝全体としての摂取排泄機能曲線を表わしており、これより得られるピーク時間 (PT), 半減時間 ($T_{1/2}$) は肝硬変の程度が進むにつれて遅延し、また ICG とも良好な相関が得られ、肝機能の評価法として有用であると思われる。

12. 肝シンチグラムが診断に有用であった肝の focal nodular hyperplasia の 1 例

平山 貴紳 深江 俊三 吉居 俊朗
 高橋 一之 田中 俊彦 森田誠一郎
 大竹 久 (久留米大・放)

小児の腹部腫瘍、とくに肝腫瘍では、悪性のものを常に念頭におく必要がある。今回われわれは、2歳男児で腹部腫瘍を主訴として来院、エコー、CT、Angio にて solid mass として描出され、肝の悪性疾患との鑑別が問題となったが、肝シンチグラム上、正常肝と同程度の activity が認められたことより、良性疾患の可能性が強く示唆され、良・悪性の鑑別に有用であった FNH の症例を経験したので報告した。

13. ^{123}I -IMP による脳血流量定量——簡便な静脈採血法の経験と動脈採血法との比較——

窪田 孝之 斉藤 匠司 森 幸一
 木下 博史 (長崎大・放部)
 伊東 昌子 大坪まゆみ 計屋 慧實
 本保善一郎 (同・放)

^{123}I -IMP と回転型ガンマカメラを用いて、動脈採血による脳血流量定量を過去 185 例行ってきた。今回金沢大・松田らの方法による、静脈採血よりの定量について経験する機会を得たので、その方法と両者の比較について報告した。静脈採血法は正常脳組織における洗い出し率と、分配係数（脳内放射能濃度と静脈血オクタノール抽出カウントとの比）より IMP-nomogram を用いて血流量を算出する。両定量法を併用した症例は 17 例でそのうち 12 例では良好な関係であった。洗い出し率算出のための正常脳組織は慎重に判定したが、残りの 5 例については大きな解離が見られた。さらに検討を加えたい。

14. PET を用いた $\text{O-}^{15}\text{H}_2\text{O}$ 一回静注法による脳血流量測定と負荷検査

桑原 康雄 一矢 有一 大塚 誠
 三宅 義徳 増田 康治 (九州大・放)

PET による脳血流量測定において、 $\text{O-}^{15}\text{H}_2\text{O}$ 一回静注法は測定時間が短いため患者の負担が少なく、負荷検